アタランテお母さん～貴女は育て方を間違えました～

ら・ま・ミュウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「お母さんに会いたい……それだけで、私は――」過去の聖杯戦争で偶発的にアタランテのマスターとなった少女が、アタランテの間違った教育と悲劇的な別れによって闇堕ちして世界を敵に回すお話。

注意『アタランテお母さん～聖杯戦争で子育て頑張る！～』のネタバレを盛大に含んでいます。あっちが好きな人は絶対に見てはいけないぞ！

目　次

プロローグ ―― 1
レオナルドが壊れた ―― 3
カルナさん ―― 5
神の代行者 ―― 8

プロローグ

サンザーラという紀元前から存在した魔術一家があった。
かつて時計塔のロードの席を預かるも、極東の冬木にて第二次聖杯戦争なるものに参加して以来、時計塔を離れ没落の一手を辿っている。マリスビリーが現代当主である彼女をスカウトするまでサンザーラは既に滅びた魔術家系だと古い魔術師達はそう思っていた。
「これは凄い、マスター適正もレイシフト適正もシステムのほぼ最高値だ！君は間違いなくＡチーム行きだね！」
「……そう」
欠けた魔術刻印を宿す少女。
マリー・サンザーラ
天性の美貌を持ちながら、どこか儚く目を離せば途端に消えてしまいそうな危うさを持つ彼女は、サンザーラの現代当主にして三重元素使い、豊富な魔術回路に恵まれた一流と呼ばれる魔術師であることながら異例のマスター適正とレイシフト適正を叩き出した。
これだけ優秀ならば、時計塔のロードへと返り咲くことも出来よう。カルデアに人理修復のマスターとして招かれた魔術師達の誰もがそう思った。
しかし、彼女はそれを望まない。彼女には……いや、サンザーラには野心と呼べる物が元からなかった。
時計塔に在籍していたのは優秀な魔術師の遺伝子をサンザーラに取り込む為に。時期こそ重なったがサンザーラが時計塔を離れた本当の理由は彼らから種を回収し終えたから。
第二次聖杯戦争など、本来の目的を影に潜ませるＦａｋｅに他ならない。
そうだ。彼らは没落などしていなかった。
ただ目的の為に坦々と作業をこなして、他の魔術師達が権力争いにうつつを抜かす中、確実に悲願へと近づき……『マリー・サンザーラ』彼女が誕生した時点でサンザーラ家の悲願は達成された。

「馬鹿な、そんな事があっていい……筈がない」
シルクハットの紳士が額に汗をかきながら喘ぐ。
「私のことは、彼らに黙っておいて」
「了解……しました」

マリスビリーのスカウトに応じたのは、異星の神を相手に〝この力〟がどう傾くか調べる為。
人理焼却が藤丸リツカによって解消される事実もその後に現れる※※が又もや藤丸リツカによって解決される事などアニムスフィアが知り得る数百年も前からサンザーラ家は把握していた。
全てはどうでもよかった。完成されたサンザーラにとって全ては手のひらで踊る余興に過ぎない。

『状況の変化を確認した。
栄光を選ぶならば、蘇生を選べ。怠惰を望むならば、永久の眠りを選べ
神はどちらでもいい』
「……私はお母さんに会いたい」
マリー・サンザーラ
彼女がたった一つの願いを叶えんが為、人理とサンザーラ家を裏切るまでは。

レオナルドが壊れた

世界へ７つの種子が落とされる。
隕石より緩やかに星の煌めきより鮮やかに……
「馬鹿な……七つだと？
彼女は、まさか……だとすれば異星の神は」ブツブツブツ
ホームズの狼狽えたような声が鼓膜を打つ。
「……」
彼らにはその終わりを見届ける事しか出来なかった。
２０１７年　１２月３１日
世界は再び……僕たち（汎人類史）を忘れた。

――カルデア

コツ……コツ……
コツコツ……コツコツ……コツコツ……

氷層の上を歩く少女　マリー・サンザーラ
現存する魔術師の中で最も古く、かつては時計塔のロードにすら登りつけたサンザーラ家の現代当主である彼女は、陰りのある顔を僅かに歪めて悪態をつく。
「やっぱり……私が行けばよかった」
Ａチーム。人理の裏切り者として今は『クリプター』と名乗る彼女は、つい先ほどキャスター『アナスタシア』と入れ替わるようにして変わり果てたカルデアに転移してきた。
そして、あまりの〝がさつ〟な仕事ぶりに呆れて物もいえない。
カルデアに保管された英霊の霊基情報（パターン）を回収出来ないばかりか、殆どの重要機材は凍りつき、レイシフトシステムに至っては通常の手段

では修復不可能な段階まで壊されている。
「なんて、無駄なんだろう……」
　藤丸リツカ率いるカルデアの生き残りが脱出した大穴を見つめながら、彼女は後ろに最誕するエーテル体へ意識を向ける。
「そうだと、思わない？
　……レオナルド・ダ・ヴィンチ」
「アア……ぁぁそうか、これがオルタナティブの感覚なのかな？」
　会話は成立しない。最誕した『レオナルド・ダ・ヴィンチ』はすっかり色の抜けてしまった髪や、低い声。４０代後半の渋めの男へと元通りになってしまった現実に少しだけ戸惑っているようだった。
　それでも構わず、彼女は続けた。
「お母さんを、迎えにいくには……もう一台ぐらい必要なんです。シャドウ・ボーダーでしたか？
　どれぐらいで造れます？」
「……そうだねぇ、いくら天才と呼ばれる私でも今のカルデアの資源だと廃材を上手く集めた所で一生掛かっても無理だと言わざるおえない」
「大丈夫です。カルデアは私が直すので。レイシフトシステムも半月もあれば使えるようになると思います」
「直すって……流石は彼のサンザーラといった所か。まぁマスターの命令にはなるべく答えてみせるのが、私の持ち味なんでね……いいだろう。どうせなら、コストを削りに削ったシャドウ・ボーダーの真の姿を見せてあげようじゃないか！」
　万能の天才は喝采するように両腕を広げ、彼女を見る。
「一応聞こう、後継機も残したし、今の私にとっては正直どうでもいいが、君は彼らの味方なのかい？」
「お母さんが望むなら、敵にも味方にも」
「そうかぁ……そそるねぇ」
　彼女から見たその瞳は、理性的のようで泥のような濁りをみせていた。

カルナさん

幾千幾万と、私は想定を繰り返す。失敗は許されない。チャンスは一度きり、お母さんが望んだ――《この世全ての子供らが愛される世界》を分岐ではない……完全なる無から創造すべく、私はこの身一つで神を騙る。

「マスター……マスター……マスター、心労が祟ったのか？ならばベッドで休むがいい。」

「……あぁあ、カルナ……それと、ジナコさん。お久しぶりです」

「ちょッ!?――ジナコって誰の事っすか！」

カルデアの修復作業に取りかかり一ヶ月もの月日が流れた。

当初は、彼女一人で済ませようと努力したものの、如何せん効率が悪すぎる。

それを心配して彼女の手助けをすべく馳せ参じたのがこの二人。

『ジナコ』……ではなく、『ガネーシャ神』

不死身の大英雄『カルナ』

彼ら二人は、レオナルドのような霊核の修復＝最誕……座から降ろしたわけではない、前回の〝記憶〟を保持したままの例外的な存在を無きものとすれば、彼女の使役する三体のサーヴァントのうちの二人だ。

「……まぁ、ジナコさんは連鎖召喚で、完全に不意打ちだったんだけどね」

「ちょっと！それひどくないっすか!?

ボクは、ガネーシャ様に頼まれて、人理を守るサーヴァントとして召喚される筈だったのに『あれ？異聞帯ってどっちだっけ』――ちょこーと道に迷った後に、カルナさんが召喚されるなら間違いないだろうと付いていったら……言われてみれば、完全に不意打ちすっ！10連ガチャで星5が出てきてテンションマックスの後に、しれっとピックアップでもない星4が出てくるみたいなもんじゃないですか！」

「うん、そうだね。にーとのジナコさんがいきなり外に出たら迷っちゃうよね」
「そしてッ召喚したマスターが、リアルのお隣さんとかっ何の罰ゲームだこの野郎！」
バシバシと地面を叩くガネーシャ神……もう、ジナコさんでいいや。彼女は自立したマリーが数年間だけ借りていたアパートのお隣さんである。魔術の魔の字も知らない一般人の筈だが、如何なる偶然か神霊擬きとなって今はマリーのサーヴァントだ。
本来ならペペの異聞帯に召喚される筈だったらしいが、元は友達といえなくもない微妙な距離感だった二人。戦うのも嫌なので、衣食住なに不自由ない生活を提供して…暫く、ガネーシャ神としての彼女が暴走する〝いざこざ〟があった後に、仕方なく彼女の神としての側面を未来永劫眠らせる事件があり、
「あんな事があったのに、変わらず受け入れてくれるマリーちゃんの深〜い気持ちは嬉しいんですけど、逆に気まずい！」戦わない事を条件に協力してくれる事になった。
彼女には機材の復旧作業を手伝ってもらい、カルナには私の世界から資材を運んで貰っている。
「この分だと、シャドウボーダーの完成もすぐだね」
「だとすると、遂に行くのか」
「はいっ！お母さんを迎えに！」

――カルナ
俺のように感情の起伏が薄く見られがちなマスター
クリプターの中で唯一異聞帯を有さず、俺たち汎人類史の味方とも敵とも言えない彼女に、求められたからと従った俺には一つだけ気がかりな事がある。
それは、彼女が満面の笑みで〝にぱー〟と笑うとき、
『――ザザ……寝返りしたぞ！――ザザ……』

『――ザザ……ザザ……おおっ……ザザ……』
『――ザザ……かるにゃ！……ザザ……』
『――ザザ……何だ、お前……泣いてるのか？……ザザ……』

頭の中で流れる、座に刻まれた程の幸せな〝記録〟
俺は過去にお前の大切な存在であったのか、「かるにゃ！」あの言葉を思い出すと、全身を駆け巡るこの感情は何なのか、

その戦いを経て受肉した筈の俺がいないのは何故なのか。

それが、決して口に出してはいけないパンドラの箱だと知りながら、いつか尋ねたいものだとカルナは心の底で思っていた。

神の代行者

キリシュタリア・ヴォーダイムは黙したまま佇んでいた。
その場所で、その光景を眺め、無感情に…しかし、何故、どうして？
疑問はつきない。

『――――サンザーラ家の悲願がソナタであったか。』
「…ええ、そうです。」

全知全能の神ゼウスと彼の手の平で会話に花を咲かせる少女。
マリー・サンザーラ
八人目のクリプターとして異星の神から通達があった。会うのは初めてだが、異星の神が言うには私を越えるほど優秀らしい。
一度会いたいとは、前々から思っていた。『会いたい』と、話が来た時は使いを寄越すつもりでいた。唐突に転移で現れたのは〝意外〟だったが、その程度私でも不可能ではない。私を越えると評価されるのなら逆に出来なくてどうする。つまり、想定の範囲内だった。

「きゃぁぁ!!!!」
黄色い悲鳴。キリシュタリアがマリーに向け、口を開こうとした瞬間に響いたそれは――オリンポスの神々一柱。
「我が子よ!あぁ、我が愛し子よ!」
ナノマシーンの体から人間に近い器を創造し、魂と記憶を込めた分離体の一体となった――ヘラだった。
「ッッゥッ!!??」
マリーに一方的に抱きつき、感激の声を漏らす彼女。
キリシュタリアがエネル顔をして驚くのも無理はない。何故、現代の魔術師が神の娘であるのか。人の側面から大きく外れ機械的な感情しか持たないヘラがまるで汎人類史側の彼女と非常に近い反応を見せた点など、全く訳がわからないのだ。

「この世界のお母さん…ヘラ様。ご元気そうで何よりです。」
「ソナタこそ！分かりなく私は嬉しい！
そちら側の私の加護が切れた時には生きた心地がしなかったぞ！」
「ごめんなさい」
ヘラがマリーをナデナデしている。
馬鹿な……どういう事だ。
キリシュタリアは横にいるカイニスへ助けを求めると、彼ないし彼女は脂汗を滲ませながら震えている。
まさか、マリーに何かされたのか。警戒するキリシュタリアであったが、カイニスはヘラに怯えているだけである。つまり、ただの勘違いだ。

『懐かしい気配を感じたと思えばサンザーラの血をひく者であったか』

「ゼウス様!?」
そこにゼウスが現れた。
彼はヘラと共にマリーを手のひらにのせ顔に近づける。

冒頭に戻る。

『ヘラを最後にサンザーラはオリンポスの神々全ての血を取り込んだ。よくぞ果たしてくれた。』
「流石我が子！」
「……」
ゼウスとヘラがベタ誉めし、少し頬を赤く染めるマリー。
不覚にも可愛いと思ってしまったキリシュタリア・ヴォーダイムは壁に頭をぶつけて正気を保とうとする。
「キリシュタリア様!?」
カイニスの後ろにいた双子のサーヴァントは悲鳴を上げる。

狂人のそれである。周りからみて彼は正気ではなかった。

『では、この世界を破壊し、我々は異星の神を撃つ準備に移ろうか』

……はっ？何を言っているのだこいつ。キリシュタリアは朦朧とする意識で思った。

そして、少し頭を打ち過ぎたのかもしれない。幻覚なんだと閃きを得る。

プツリと彼の中で何かが切れる音がした。

「……少し休むか」

そして彼は眠るように気絶する。

目が覚めた時、そこには何もなかった。